中高生とともに差別と闘う

「終い支度」

吉成タダシ（うずしおブランチ代表）

父の没後

これが読まれる頃は、さすがに涼しい秋風に包まれているでしょうか。今年も残り二か月ちょっとになっている頃です。でも書いている今はまだ、夏の名残といったところです。

夏になって半年あまり。本当にいろんなことのあった半年でした。本コラムとは趣旨が異なるかもしれませんが、本稿は小休止して、この半年のことについて書き残しておきたいと思います。

父の具合が悪くなり、再度入院したのが年明けでした。次年度異動願を出すか、留任希望を出すか迷っていたころです。父の具合が日ごと悪くなり、意識も朦朧となりつつあるなか、学年主任から、「一年、二年と持ちあがったのだから、最後一緒に三年生の卒業を見届けませんか」との声がかかったちょうどそのころ、父は鬼籍に入りました。

私にとって身近な人の死を看取るのは初めてでした。家族総出で各所へ連絡をし、葬儀の手はずを整えます。それ以降も法要は営まれます。また役所などでの様々な手続きや解約の手続き、お墓や仏壇の選定についての相談や購入などに明け暮れます。

それとは別に、独り身となった母は、物持ちの良かった父が遺した大量の遺品整理にかかりきりになりました。物にあふれ、なかなか掃除の行き届かない雑然とした部屋。屋外は屋外で、それまで父が担っていた敷地内の清掃が滞るようになります。猛暑もあって、庭のあらゆるところに雑草は生え、枯草はたまり、庭木は枝を伸ばし放題。私がどうにかすればいいのでしょうが、やったことのない私には、どこから何にどう手をつけていいのやら分からず、呆然と見つめるしかありません。

老いた母にも、できないことが多く見受けられるようになりました。おそらく父が亡くなり、やる気を失くしていることもあるのでしょう。あれをしてくれ、これをしてくれと、声がかかることも多くなりました。それらが私の目前に次々と現れては、これからこの家をどうすればいいのか、と考えるようになりました。考えれば考えるほど、ひとりで維持していくことの難しさを感じます。

「これは仕事を辞めるしかない」

じわじわと迫る実感でした。

不幸中の幸い

そんなことを感じていた夏のある日、私は突然倒れます。

気がつくと病院のベッドの上でした。何が何だか分かりませんでした。意識が戻ったのは二時間後ぐらいだったように思います。朦朧とするなかでお医者さんから話を聞きます。脳のCTスキャン画像の印刷物を見せられながら、「脳挫傷、頭蓋骨骨折ですね」と。数週間の入院とも。でも私にはその週末、「人権を語り合う中学生交流集会」が控えていましたし、その翌週には人権こども塾初の夏季一泊研修も控えていましたから、何としても早く退院したいという思いが強くありました。しかし、とにかく視野が揺れて揺れて気分が悪く、夜中何度も起きては嘔吐を繰り返すのです。食欲もなく、何も食べたくありませんでした。それでも一日一日快方には向かい、何とか退院することはできました。さすがに「人権を語り合う中学生交流集会」には参加できませんでしたが。

今回の事故は、本当に不幸中の幸いだったと思います。まず、意識が戻ったこと。そして、倒れたところに人通りがあったこと。夜の出来事でしたから、人通りの少ないところであれば、そのままになっていたかもしれません。そして、外傷が全くなかったこと。他に傷がなかったことから、おそらく頭から落ちるようにコンクリートの地面に打ちつけたのだと思われます。もし頭から出血となれば、出血量はひどいことになっていたかもしれません。出血もなく、たまたま見かけたどなたかが救急車を呼んでくれたからこそ、何事もなかったかのようにいられるのだと思います。何か一つでも不都合があれば――。本当に不幸中の幸いでした。救急車を呼んでくださった方がどなたかは分かりませんが、その方にも本当に感謝です。

終い支度

そんなこともありましたから、家のことも考え合わせると、これからどう「終い支度」をつけていくのか、本当に真剣に考えるようになりました。まだまだ私より年配の方はたくさんおいでますし、平均年齢でいえば、そんなことを考える歳ではないのかもしれません。でも、今回のようなことを考えると、人間いつ、どこで、どうなるかなんて分かるものではありません。そう思うと、残りの人生にどう「お終い」をつけていくか、どう収束の道をつけていくかは、考えておかなければならないことなんだろうと思います。

老いた母のこと、残される家のことがのしかかってきます。その前に、仕事をどうするのか、家族のことはどうするのか、すべてをかけてきた人権教育の取組はどうするのか。すべてのことをいっぺんに断ち切って片づけることはできないでしょう。ですから少しずつ無駄なものは削ぎ落としていこうと思います。あとに残る者のためにも。ではいったい、何を削ぎ落とし、何を最期まで残すのか。その選択を真剣に考えるときが来たということを、今回の出来事は教えてくれたのです。

あれから二か月。まだ首筋は動かすたびにパキパキと音が鳴りますし、肩こりもします。でも私、何やかや言っても、まだまだ長生きするのかもしれません。「憎まれ者世に憚る」ですから。まだまだやりたいこともありますし。でも多くのものが持てないことはよく分かりました。では何を置き、何を優先して持つのか。吟味していこうと思います。その極意とは――。これから諸先輩方からのアドバイスに、耳を傾けていくことにします。

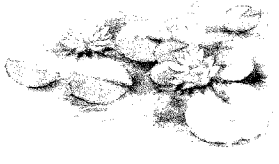

イラスト　中島　亜唯